

俳句雑誌



空

令和5年6月20日発行

第20巻6号

通巻第106号



2023・6

SORA 106号

女神

柴田佐知子

竹林に光百条鳥の恋

囀や百寿の髪は絹のごと

崖に身を打ち付けながら椿落つ

ぬかるみの多き村なり出開帳

逆襲の蹴爪を高く鶏合

勝鶏やまだ闘ひの逆毛立て

擬音語の多き童謡水ぬるむ

着付けする間より子猫の除かるる

猫の子が結婚詐欺師なら無敵

うららかや百寿の母に励まされ

―「俳壇」三月号より―

山なみに混じる馬の背春立ちぬ

雪解川山の力も得て速し

昼月が疵のごと在る木の芽山

拾はれし子猫突つ張る爪立つる

狙ふとき更に小さくなる子猫

囀や蔵の闇より楽茶碗

ひとひらの散華のごとく白蝶来



福岡 高倉 和子

鶏頭のぶつかり声をあげてをり

威銃に吹き飛ばさるる雀かな

縁側に座布団並べ月を待つ

ほめられて母の後ろへ鳳仙花

墓仕舞終へて通草の残りけり

相続のうやむやとなり柿熟るる

昨日より裾のふくらむ菊人形

櫓田にたつぷりと雨来たりけり

東京 中田 みなみ

薬のむ蟻には蟻の朝があり

蟻哀れいつも火急の用ありて

曝書して昔の愛の波立たず

向日葵の夜の貌上げてベルを押す

剥く度に弾け笑ひの春キャベツ

布袋草渡り歩きの恋の鳥

秋晴や海へ波打つ能登棚田

初鴨の考へてゐる牡蠣筏

長崎 荒井 千佐代

押入れに午後の日の射す冬となり

後輩にときどき敬語竜の玉

浮寝鳥見てゐる人を見てをりぬ

ト音記号の曲線美しき冬はじめ

麦の芽や先に許せば許さるる

炉話のおほかた殉教・被爆のこと

礫像の裏に猪鬃雨しとど

ロザリオを入れし骨壺山眠る

埼玉 服部 早苗

来て欲しき角度には来ず扇風機

亡き人のファックスの文字合歓の花

七夕笹を持つ子背に負ひペダル踏む

しがみつく力も少しとこよむし

夏風邪や睡りの奥の雨の音

物干しの洗濯ばさみまで灼けて

八月や海の照りある龍馬像

晩涼や皿鉢料理の貝・うつぼ



北九州

深川淑枝

遥かなる銃声薔薇を剪りしとき

訃報受く夜の鶏頭影太し

旅を恋ふひまはり深く首を垂れ

炎天を来て玉眼の盆怒仏

螢火の大き清滝橋あたり

仁和寺の塔を雲ゆくソーダ水

襖絵の余白の涼し相国寺

観音の千手の一手砧持つ

広島

戸栗末廣

一行も書けず八月十五日

大棚にずらりと秋の新刊書

戸籍課に順番を待つ秋暑かな

おしろいや夕べ明るき裏通り

秋風や川原で食ぶる握り飯

末枯や浅瀬を上る鮎の影

金木犀空は一途に晴れわたり

応接間に青蜜柑の香走りけり

福岡

角野良生

たつぷりと余す袋や袋掛け

早苗みな雨に溺れてをりにけり

乗り降りもなし麦秋の無人駅

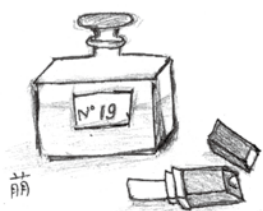
義人の名残る隧道滴れり

滝一つ背負うてをりぬ滝行者

滝に仕へ山に仕へて青不動

兜虫にも不戦敗と言ふがあり

北斎の大波くぐり抜くサーファー



空集抄 柴田佐知子抄出

この先は乾ふ他なし唐辛子

身の内の澱ごと夕立去りにけり

ころげ出て貌ほのぼのと栗の虫

胸板を踏みつけてゆく春の猫

秋晴に杉箸割つて応へけり

蝮酒老いさらばうてなるものか

雀らの砂浴びの窪朝曇り

採血に始まるひと日夏の雨

乙姫に会ひたき雀蛤に

立秋やひねりし反古が火に緩ぶ

送り火や帰したくない人ばかり

空き家より聞こえてきたるきりぎりす

一切れの西瓜をすすり母逝きぬ

どの隙間からも飛び出す子猫の手

鮑屑もらひに来たる日焼の子

亡き母の香水の色濃くなりぬ

ジーンズで磨きし林檎差し出さる

西坂は殉教の道鷹渡る

座布団を借りて並べて盆の家

美術展「海の幸」とは鮫のこと

養殖の鰯の撒き餌へ海猫群るる

星月夜母に偽り言ひしこと

屈葬のごと運転席の三尺寝

高倉和子

石橋幾代

戸栗末廣

吉田 律

中田みなみ

角野良生

深川淑枝

苑 実 耶

永淵恵子

原 友 子

宮井知英

星加鷹彦

大西乃子

あさなが捷

曾根富久恵

石井みゆき

今井康子

山本則男

松田明子

田中とし江

河原敬子

田岡千章

三井所美智子



蚯蚓死す伸ぶる力を使ひきり

商店街の奥の奥まで秋夕焼

秋暑しのつしのつしと牛の影

しまひ湯のあと秋風へ窓ひらく

またも見し蛇は棲み着くつもりらし

一斉に村をつなぎし彼岸花

冷奴平均的な通知表

秋高し帆は張らねども日本丸

夜桜や耳にねつとり京言葉

行進を統ぶる笛の音秋高し

母の世を思ひ爪切る夜の秋

微酔ひや天の川まで行けさうな

引潮に小石うち合ふ夏の果

秋風や眠るふりする猫の髭

一途なる恋も終りぬ大夕立

暮早し道路補修の音響き

生まるるも死ぬるも他力沙羅の花

朝刊に寝そべる猫や青簾

初釜の菓子をこぼしてしまひけり

解氷の音響く村月昇る

夜をこめてまだみぬ子へと毛糸編む

面取れば湯気立つかうべ初稽古

ガラス戸に青き夜ありメロン食ふ

眦に朱色はね上げ秋まつり

ふるさを発つための駅夕かなかな

一番星つくし摘む子よはよ帰れ

野中みのり

坂口 学

中村瑞枝

牧 康子

横田敬子

林 徹也

仲里奈央

早田保子

鈴 懸るい

森田明成

山田正子

倉智万数雄

えとう樹里

兒玉充代

吉田悦子

岡村尚子

宮原孝一

むつみ蓮

吉田容子

林 れい

松井順子

山根可寿志

本多トミ

高畑 桂

村上二三

片方善治

空集

柴田佐知子選



この先は乾ぶ他なし唐辛子

鰻絵描く梯子の上を鳥渡る

大滝を去り尋常な世に戻る

海風の荒んできたる秋遍路

鈴一つ転がつてゐる祭あと

身の内の澱ごと夕立去りにけり

その果てに死神の待つ大花野

刈伏の藁踏む蟋蟀が跳ぬる

水底も空の明るさ秋の蟬

一本の電柱の影原爆忌

校庭の真中に踊りやぐらかな

水平線まぢかに秋の更衣

直方 石橋幾代

広島 戸栗末廣

極めたる白磁の薄さ秋気澄む

表札の跡の白さや鰯雲

芒原吹かれて道の現るる

厨房のきしむ踏台秋土用

後悔に非ず無花果食べてをり

ころげ出て貌ほのぼのと栗の虫

逢ひに行く胸にふはふは赤い羽根

石鹼玉風に歪みを正しをり

春日傘くると回す返事かな

胸板を踏みつけてゆく春の猫

鳥帰るびくともしない壘の蓋

首塚ののつぺらぼうや紋黄蝶

小ぬか雨打ち傷のある忘れ角

秋晴に杉箸割つて応へけり

水引草の盛りどうやら今らしき

ひつそりと泣きし蓑虫貌出せり

放たれて蟹に怯ゆる罔蟹

敬老日附録のやうに頷きぬ

断念の残り火のごと梅雨夕焼

引き返すときも尺蠖虫なりし

蝮酒老いさらばうてなるものか

この暑さ瘦身盾にしのごべし

立前を通す男や油照り

祭来る氷屋の鋸したたりて

雀らの砂浴びの窪朝曇

白雲の低く過ぎけり罔籠

蛇脱ぎし白き無縫の天衣かな

風来れば野のたてがみの花芒

採血に始まるひと日夏の雨

福岡 角野良生

北州 深川淑枝

須恵 苑 実耶